旗じるし

ことしこそとひそかに誓うのだが、それを破って幾十年、またこれからもそのくり返しを幾年もすることだろう。だから、私は新年に当たりきまって思い浮かべる。恩師下村湖人の好んで話した一つの比喩を。

佐竹義宣のある家臣がいつの日の戦いからか「一足不去忠野左文」という背幟を立てて臨んでいた。敵に向かって一歩も退かないという文句である。ある日の戦いで味方は総崩れ、彼もいつしか退却していた。ひとり馬に水をやろうと川にかがむと、背の幟が水面に写っているではないか。彼は夜に入ると一騎敵陣に斬りこみ、敵将の首級をあげて引き揚げた。

たてた誓いは外に示すものではない。しかし、誓いが自分で破られやすいのも事実である。彼は衆目をひそかに証人にたてて、自らの弱い魂への笞とした。幟は彼を怯懦から救ってくれた。

私たちの特別養護老人ホームでも、寝ついた老人に床ずれは一人もいない。生の果

てに床ずれで苦しめることは許されない。寮母はその記録を保持しようと誓い合っていたが、マスコミに評価されて表に出てしまった。「床ずれゼロ」―この旗じるしを掲げさせられてしまった。もう下ろしようもない。

床ずれゼロの意義とその経過を、私は『老人ホームはいま』という小著にも明らかにせねばならなくなった。病老人のおせわはやがて床ずれに直結するからである。

それを評論家松田道雄氏は「老人の介護について書かれた本の中で、最も感動的で、最も学問的」と評した。この高い評価を素直に受けようと思う。ホームの老人に対し、寮母たちの身内のごとく仕える日夜の努力、それが端的に床ずれゼロに表現されているからである。

床ずれは数分の油断ででもできてしまう怖い病気である。任運荘の寮母は掲げてしまった旗じるしに緊張と誇りを、いま生きている。私は旗じるしがもはや無用となる日が待ち遠しい。

（一九八一年一月十九日）